

<b>1 学校教育目標</b> 一人一人の思いや願いを大切に、個性を生かしながら、児童生徒の自立と社会参加をめざす教育の推進 ～自立活動の視点から教育課程をオーダーメイドする～							
<b>2 本校の使命</b> 学校教育法に基づき、知的発達に遅れがある児童生徒が、社会の中で生き生きと暮らしていく姿を目指し、児童生徒一人一人の可能性を最大限に伸ばす教育を行う。 ○山口大学教育学部の附属学校として、大学と連携して先導的・実践的な研究を進めるとともに、教員を養成するための教育実習に取り組む。また、大学や地域と連携した教員研修の支援を行う。 ○webを活用した教員研修及び他附属学校園の学校支援の実施により特別支援教育のセンター的機能の強化を図る。また、ヤマミの一むでの幼児及び保護者支援を行う幼児教育相談等地域支援の取組の充実を図る。							
<b>3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題</b>							
<b>&lt;重点を置いて目指す成果・特色&gt;</b> <b>[附属特別支援学校の役割]</b> □ <b>教育研究</b> 「育成すべき資質・能力を支える『自立活動』を基軸としたカリキュラムモデルの開発(3年次)」 - 自立活動の個別の指導計画の作成と活用をとおして- □ <b>教員養成・教員研修</b> ○教育実習、介護等体験、大学院生実習、長期研修実習 ○地域の学校教員を対象とした公開研修会の実施 □ <b>大学・地域連携</b> ○教育学部やまぐち学園への継続的な指導者支援 ○本校教員研修への支援 ○地域貢献、学校支援		<b>[自立と社会参加に向けて]</b> □ <b>めざす子ども像</b> ○興味関心を生かす子ども ○自己肯定感を高める子ども ○自主性・主体性を獲得する子ども ○社会性を獲得する子ども □ <b>チャレンジ目標</b> ○あいさつ ○マナー * 相手を意識した行動 * 相手を尊重した行動		<b>[特別支援学校のセンター的機能の充実]</b> □ <b>webを活用した教員研修</b> ○オンデマンド配信/アーカイブ配信を取り入れたハイブリッド方式による研修会実施 ○オンラインによるケース検討会の開催 □ <b>幼児教育相談</b> ○ヤマミの一むでの幼児及び保護者支援 □ <b>地域支援</b> ○人や地域をつなぐ取組		<b>&lt;取り組むべき課題&gt;</b> □ <b>業務改善</b> ○時間外勤務の削減 ○働き方の意識改革 ○チームでの取組強化 ○カリマネの充実 □ <b>情報発信</b> ○各種たより ○ホームページ ○Webの活用 □ <b>特色ある学校づくり</b> ○教職員人材育成 ○教育実習の充実 ○CSの連携・協働 ○児童生徒定員確保	
<b>4 自己評価</b>					<b>5 学校関係者評価</b>		
評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
学習指導	一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育活動を行い、個々の能力の伸長を図る。	○自立活動の指導を基軸とし、一人一人の良さや強みを生かした教育活動を展開する。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○教職員には自立活動を軸とした、一人一人の良さや強みを生かした教育活動を展開しようとする意識が定着している。しかし、保護者には懐疑的な意見もあることから、授業担当者の意図が伝わっていないことも考えられる。	教員は伝えつもりでも、保護者には伝わっていないことが多い。分かってもらうために何をするか、意識改革が必要である。 自立活動を保護者や地域の人に見せたり、一緒に行ったりする参観日などはどうか。「人権参観」などテーマがあった方が来校者が多い傾向がある。	B
		○個別の指導計画の適切な作成及び活用により、各教科や領域等において、ねらいや評価を明確にした授業を行う。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○概ねできていると考えられるが、より一層の個別の指導計画の活用(ねらいと評価の明確化)を図るとともに、保護者に対して授業のねらいを発信できる機会があってもよいのではないかとと思う。(参観日等)		
生徒指導	児童生徒が明るく楽しく学校生活を送ることができることをめざす。	①児童生徒の一人一人の実態に応じた「あいさつ」習慣の定着を図る。 ・「あいさつ標語」運動(平川地域コミュニティ推進協議会) ・児童生徒会によるあいさつ運動 ②いじめに関する予防的な取組を行う。 ③児童生徒が相談しやすい環境を作る。 ④児童生徒会活動の充実	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4 但し ①は 3	●児童生徒会を中心に月2回、計14回実施。あいさつについては児童生徒会の取組だけではなく、日常生活で継続的に取り組むことも大切である。「あいさつ標語」には、児童生徒、教員が応募し、表彰を受けた。 ○いじめに関する取組については、日頃からの教員と保護者、教員同士の情報共有を行っている。また、7月に警察による予防的な情報モラル学習を実施した。 ○教育相談を年3回実施。学級担任を中心に、学部全体で対応。SCと生徒との面談機会を設定した。自分の悩みを他の人に話す方法を学ぶ機会にすることができた。 ○ふようまつりと新年お楽しみ会は生徒主体で企画運営を実施し活動を行うことができた。	外部から見て、あいさつはできているように思う。あいさつが「できていない」評価基準は何か。話すあいさつだけでなく、一人一人に合ったあいさつという視点が大切である。	B
		実際の災害をより想定した防災に対する取り組みを検討する。	①インターネット等を使用した防災対策についての情報収集 ②防災訓練の実施(不審者対応避難訓練、引き渡し訓練、防災訓練) ③防災訓練の内容に即した防災教育の実施(おはしまか、いかのおすし等)	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○年3回の防災訓練を計画的に実施できた。不審者対応避難訓練では、警察や少年安全サポーターの方に来ていただき、お話をいただいた。火災避難訓練では消防署の方に来ていただき、消火器の使い方について説明していただいた。	防災教育は重要であり、児童生徒の実態に応じ行う。教員は教員で、子どもの安全を守るために必要な研修を行うことも大切。
健康安全	学校保健計画に基づき、学校全体で心や身体の健康に関する学習に取り組む。児童生徒が健康な生活に関心をもちながら行動することができるようにする。	①児童生徒の実態把握を行い、学部や担任と連携しながら、健康に関する学習を行う。 ②保健体育専門部を中心に、児童生徒の心身の健康、保健衛生に関する取組を行う。 ③性に関する教育について教材研究、教材作成、指導実践の蓄積を行う。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○各学部の教員と連携して児童生徒の実態に応じた手洗いや歯磨きに関する指導を行った。また、養護教諭によるミールラウンドを実施し、給食時における児童生徒の実態把握を行った。 ○保健体育専門部では、熱中症の予防やインフルエンザ流行による感染予防の呼びかけや、生徒の身長に関する掲示を作成し、児童生徒の自分の健康や身体への関心を高めることができた。 ○性に関する指導については、年間指導計画の改善に着手している。今後は計画をもとに実践の蓄積を行いたい。	取組の発信は、簡単でもよいから、こまめに情報発信をする和良好的。性に関する指導については、形や内容に注視するのではなく、人権意識を中心として考えと児童生徒にとっても有意義な指導になる。日々の生活をベースにして、まずは教師の人権意識を高めることが重要である。	A
進路指導	児童生徒の自己実現に向けたキャリア教育の視点を取り入れた授業作りを行う。	①キャリア教育の視点を取り入れた授業実践を行う。 ②定期的に、各授業または学部で取組内容と状況の振り返りを行う。 ③今年度の取組を来年度の年間計画の作成に生かす。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○年間を通して、各学部のキャリア教育の視点を取り入れた授業実践ができた。 ○各授業、各学部において、内容と状況をその都度振り返ることができた。 ○今年度行った取組を生かし来年度につなげるべく、各学部また全体で話し合いながら年間計画の作成をしていく。	中高の実習の意図の違いなど、細かな部分まで教員、保護者ともに学ぶ機会をつくることよい。	B
		保護者の参加できる研修会等を企画し、保護者への情報提供を行う。	○アンケート等により、保護者のニーズを把握し、進路に関する保護者研修会等の情報発信を行う。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○保護者からの希望や、ニーズに応えた情報を発信することができた。一方、教員一人一人が進路情報や検定などについて、もっと知ることが必要である。	保護者、担任、進路担当者がしっかり思いを共有した上で、事業所や関係機関と連携をはかり、必要な情報を共有する必要がある。 報告会など、保護者が参加しやすい形(例えばオンデマンド等)の工夫があることよい。

評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
発達支援	特別な支援を必要とする幼児に体験的な環境を提供するとともに、その保護者に対して発達支援、療育相談、就学等についての情報提供を行う。	○ヤマミイの一むの取り組みに関して、利用者の満足度を高めていく。 ・ヤマミイの一むの運営 ・参加幼児の実態把握、支援計画の作成 ・ケース検討会の定期的な実施 ・大学との連携 ・参加幼児の在籍園との連携 ・保護者相談・ペアレント・トレーニングの実施	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○年間を通して、季節や幼児の実態に沿った内容を仕組むことができた。 ○山大心理学院生の実習を受け入れ、毎回同じ実習生が参加することで幼児の実態把握や変容がより細やかにできるように、個に応じた柔軟な対応が可能となった。 ○山大から3名の講師を招き、保護者相談を実施することで幅広い意見を聴くことができ、保護者同士も繋がる機会が昨年度より多く設定できた。	今年度のような山大との連携した取組はヤマミイの一むの大きな強みになる。そこをアピールした情報発信をすることで、今後の利用者の獲得に繋がるのではないかと。	A
	附属学校園のニーズに応え、特別支援教育の視点から各学校園を支援する。	○附属学校園に関して、巡回訪問や保護者相談、園内委員会の出席、助言を行う。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○附属幼稚園には、定期的に訪問し幼児の様子を観察し、園内委員会や発達相談会で助言を行った。 ○附属小中には、連携教員が訪問し児童生徒への直接的な指導、教師への助言、講師依頼の調整を行った。各学校から喜ばれ、今後も継続的なサポートを望まれている。	附属学校園へのフィードバックがよい。年度末に双方の担当が変わっても継続できるように、取組方法を各校で考える機会があるとうい。	A
情報	GIGAスクール構想の実現に向けICT機器の活用を推進する	○各学部で一人一台タブレット型端末を活用した授業を実践する。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○アプリに関する相談に乗ったり、紹介をしたり、依頼があった場合は早急にアプリをダウンロードしたりして、タブレット端末を授業で活用しやすい状態にすることができた。	タブレット型端末の使用方法については大学との確認が必要である。より有効的に活用できるよう研修等考えていきたい。	A
研修	自立活動の指導の充実・強化を図る。	○自立活動の個別の指導計画の立て方について全校で共通理解を図り、学部や学級で検討して作成する。 ○年2回の研修会を開き、県内外の教員と本校の実践を共有し、互いに学び合う場を提供する。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○全校で研修会を開き、全教職員で取り組むことで自立活動の個別の指導計画の立て方について共通理解を図ることができた。一人一人の自立活動の指導の充実のために、学部や学級で検討することができた。 ○7月に県内の教員へ向けて本校の実践を共有したり、座談会で情報交換を行ったりして互いに学び合うことができた。1月には県外の教員も対象にした授業づくり研修会を行う。教員の指導力や専門性向上に向けて、充実したものになるよう取り組んでいきたい。	引き続き、実践・成果を地域に発信できるよう研究を進めていく。公立教員のニーズを正確に把握していく必要がある。	A
教育実習	教育実習生の主体的、対話的で深い学びのための系統だった指導体制を構築する。	○昨年度の実施状況やアンケートをもとに、以下の課題に対する改善に取り組む。 ①基本実習とオプション実習での指導案作成について、教員間で再確認し、共通理解する。 ②授業検討会の進め方の充実を図る。 ③参加実習の実習内容の充実を図る。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	①実習後に教員アンケートをし、指導案作成についての悩みや成果を共有した。学習指導要領を踏まえた指導をする教員が増え、実習生が根拠をもって授業の立案をすることができた。 ②実習生の質や雰囲気に合わせて細かな指導ができたが、実習生からはより充実を求める声が上がっている。大学での予習の機会があるとありがたい。 ③今年度より実習内容がコロナ禍前に戻った。大学担当者とのやりとりがしやすく、大きなトラブルなく充実した実習ができた。	教員が、昔よりも憧れをもちにくい職業になった。教員は労働者であるとともに研究者でもある。さらに教員としてのミッションは、生徒を育てる、社会とつなぐところにあるので、教育実習生には、教員の仕事を語り、使命感を育ててほしい。	A
開かれた学校づくり	児童生徒一人ひとりの自己実現と社会参加をめざし、社会と連携した開かれた教育過程を推進する。	○平川地域や大学、外部機関と連携した学習活動を実践する。 ・学校間交流 ・ゲストティーチャーの招へい ・コミュニティルームの活用	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○各学部で、必要に応じて外部講師を招聘したり、学校間交流を実施したりした。次年度に向けて課題を整理し効果的に継続していきたい。 ○コミュニティルームの活用について、高等部を中心になごみカフェを展開。外部団体や地域の方々へ本校を知っていただく機会となっている。教育課程上の位置づけについて整理し無理なく継続していきたい。	「地域道德」など、運営協議会や地域を巻き込んだ授業実践は効果的。地域や地域の学校、PTA・OBとも連携すると児童生徒の指導面でも良い影響を及ぼすことが多い。コミュニティルームで参観日の茶話会等、いろいろな企画をしてみようか。	A
		○学校説明会や授業参観、懇談会等を設定したり、学校だよりやホームページ等を利用したりして、本校のことを幅広く情報発信する。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○本年度は、学校説明会を2回実施。1回目は従来通りの学校関係者を対象とし、2回目は教育機関や福祉関係者を対象とし、広く本校を知ってもらうことによって、センター的機能の充実や入学者の増加を図った。2回とも盛会であり、次年度は計画的に実施したい。 ○保護者への情報発信は評価も高い。学校見学者の中には、HPを見て来校する人も多い。HPを充実させたい。	テーマのある参観日の計画をする保護者の集まりが良い。保護者会に合わせたカフェの展開も考えられる。何事もやり続けることが大切。	A
業務改善	全教職員が参画し、組織的に業務改善を推進する。	○学校運営組織の適正な人数配置と、学校行事・学部行事の見直し、分掌業務の精選、ICTの活用等による、業務のスリム化と効率化を図る。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○各学部の人数配置においてはほぼ適正であったと考えているが、予測外の事態にあたっては、非常勤講師の臨時的な採用で対応した。 ○仕事に偏りが生じないように留意するとともに、雇用形態にとらわれず、働きやすい環境を作る必要がある。 ○学部行事や分掌業務について各部で必要なものを精選し、教職員の負担軽減につながるよう年度末に見直しを図りたい。	一人ひとりの意識改革が必要。働き方は一律にはいきにくい。一人ひとりが自分の業務に合わせてメリハリのある働き方を必要がある。	A
		○年間の時間外業務時間の平均が31時間以内になるようにするとともに、実感を伴った業務改善とならうようにする。	学校評価アンケートによる関連項目の肯定的な回答が、 4:80%以上であった。 3:70%以上80%未満であった。 2:60%以上70%未満であった。 1:60%未満であった。	4	○時間外業務時間については、1月末の段階で昨年度の18%ほどカットしている。月平均は、26.5時間である。教職員の協力もあり、実質的には時間外労働時間は減少しているが、教職員の疲労感がぬぐえない。行事や業務の精選を行い、日々しっかりと子供と向き合えるようにしたい。具体的には、学部行事の見直し、教育実習期間の見直し、研修日程の見直し等を、各部や大学と共に実践していく予定である。	教員の業務のうち、研究に関する時間は、一人一人の認識に任されている。仕事を整理しメリハリをつけるアドバイスも必要。	A

評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
<b>5 学校評価総括(取組の成果と課題)</b>							
<p>各項目において、概ね重点目標の達成に向けて、具体的方策に沿って実践を行い、成果を上げることができた。  今年度、重点を置いて目指す成果・課題について、主な成果及び課題は以下に示すとおりである。</p> <p>【附属特別支援学校の役割】</p> <p>○教育研究  成果：3年次計画で行った「自立活動を基軸としたカリキュラムモデルの開発」のまとめ、集合型授業づくり研修会開催による、研究成果の提供。Webによる情報提供。  課題：今後、作成したカリキュラムモデルの検証と更なる充実。教員の専門性の向上。地域ニーズの把握とそれに基づく研究内容の見直し。大学資源のさらなる活用。</p> <p>○教員養成・教員研修  成果：時間的な制約のある中で充実した教育実習指導。年2回の授業づくり研修会による現場教員の専門性の向上に寄与。長期研修生の学びの場の提供。  課題：実習指導等を行う教員の専門性の向上。</p> <p>○大学・地域連携  成果：近隣校との交流学習。高等部ショップの大学や地域での開催。地域からの「本物と触れ合う会」への支援。山口市商店街での児童生徒作品展の開催。大学教授による授業の実施。  課題：地域との相互交流の活性化。連携の強化と情報発信。</p> <p>【自立と社会参加に向けて】</p> <p>○めざす子ども像  成果：「学校教育に関するアンケート(保護者版)」の関連項目の高評価。児童生徒会役員選挙への立候補や外部検定・競技会等への積極参加。  課題：不登校及び不登校傾向のある児童生徒への指導・支援の継続及び充実。地域連携によるキャリア教育、コミュニケーション指導の充実。</p> <p>○チャレンジ目標  成果：児童生徒会を中心とした運動の継続実施。  課題：アンケート(教職員版)の評価項目の保護者版との差。一人一人に応じた指導目標の明確化と般化。</p> <p>【特別支援学校のセンター的機能の充実】</p> <p>○webを活用した教員研修  成果：夏季公開研修会への参加者増(案内を送付する地域の拡大により、63名以上の参加:前年比23名増)。小グループでの座談会により、参加者の発言機会の確保。  課題：ニーズに応じたテーマ設定。</p> <p>○幼児教育相談  成果：年間20回のヤマミィの一むの実施。山大幼児教育講座との連携による活動の充実。山大心理学院生の実践による学びの場の提供。附属幼稚園との連携。  課題：継続的な定員確保(特に年長児)、市幼児通級との連携及び区別化。附属学校園との連携の在り方。</p> <p>○地域支援  成果：園内支援委員会への参画、スクリーニングなど幼稚園への支援(要請による)。公立中学校や県立総合支援学校、他団体への研修講師。山口市教育支援委員会への出席。  課題：地域のニーズの把握と本校の役割の明確化。</p> <p>【業務改善】</p> <p>成果：時間外在校等時間の削減。  課題：分掌部長の業務負担。教員の疲労感の軽減。</p>							
<b>6 次年度への提言(学校運営協議会委員の意見を中心に)</b>							
<p>上記5の成果と課題を踏まえて、来年度に向けた提言を中心に、特に以下の点に取り組みたい。</p> <p>【附属特別支援学校の役割】</p> <p>○教育研究  ・地域のニーズの把握と本校の教育課程の充実。</p> <p>○教員養成・教員研修  ・学生の基礎力、実践力を培う指導・支援の充実。現場教員のニーズに基づく専門性を高める研修設定。</p> <p>○大学・地域連携  ・情報発信の充実。分かりやすい内容をターゲットに応じた方法で発信する。(HP、SNS、チラシ、広報誌等)  ・大学、地域の学校とお互いのニーズを明確にし、連携を強化。</p> <p>【特別支援学校のセンター的機能の充実】</p> <p>○webを活用した教員研修  ・システム運用の円滑化に向けて、大学資源の活用を進める。</p> <p>○幼児教育相談  ・地域の幼児教育相談としての目的の明確化。附属学校園との連携の充実。</p> <p>【業務改善】</p> <p>○分掌及び学部内業務の総括的な見直しによる業務の平準化を図り、時間外在校等時間のさらなる削減を実現する。</p>							